Library and Information Science No. 32 1994

表現行為を分析するための枠組みの検討：情報メディア形成過程に関する一観点として

A Framework for analysing Processes of Representation: As a Viewpoint for the study of information generation

村　主　千　賀
Chika Muranushi

Résumé

The purpose of this study is to investigate the process of genaration of information in the light of the notion related to the representation process. Approach in the field of 'HYOGEN-GAKU' (studies of representation) and rhetoric are analyzed. Five factors involved in the representation process (sender, media, recipient, context, aim) and their interrelations are identified. Based on these analysis, a model of representation process is formed. The model indicates interactive relations among the constituent factors of the process. It is suggested that the interactive relationship depicted by the model is of significance for understanding the generation and transmission of information.

I. はじめに
- **A.** 目的
- **B.** 方法

II. 「表現」とは：語義の調査からみた「表現」
- **A.** 語の使われ方からみた「表現」
- **B.** 辞書の記述に関する調査

III. 表現研究について
- **A.** 情報学における「表現」に関わる研究
- **B.** 表現学およびレトリック研究におけるアプローチ
- **C.** まとめ

IV. 表現過程の基本要素とその相互関係のモデル化
- **A.** 基本要素について
- **B.** 基本要素間の関係と表現過程

V. 結論

村主千賀：愛知淑徳大学大学院図書館情報学専攻博士課程，愛知県愛知郡長久手町長湫片平 9
Chika Muranushi: Graduate School of Library and Information Science, Aichi Shukutoku University, 9 Katahira, Nagakute-cho, Aichi-gun, Aichi-ken, 480-11 Japan
1994 年 12 月 13 日受付

I. はじめに

A. 目的

本稿の目的は，人間の表現行為と情報との関係を探ることである。そして，情報メディアの形成過程を表現過程と捉えることにより，情報学における情報メディアに関する見方を補完する観点を確立することを目指す。

このような目的のため，後に論ずるとおり，本稿では表現の概念をなるべく包括的に捉える。したがって，本稿で取り扱う問題は「情報メディアに関する記述・表現」という限定された問題には留らない。

また，表現の問題を物理的な構造や情報メディアの表面上の様子の問題に限定せず，そうしたものも表現物の生成される過程全体の中に位置付け，そうした過程における表現主体の行為と切り離さずに捉える観点を追究したい。同様に，表現の過程を「心の中にすでに存在する情報を物理的媒体を用いて表すこと」という意味合いで捉え，情報メディア形成の過程の一部と考えるのではなく，「情報メディアの形成」の過程全体を「表現行為」の過程として捉えなおす観点を追究することが本稿の立場である。もうすこし細かくいえば，「情報メディアとその形成主体との関係」を「表現行為の産物と表現行為を遂行する主体との関係」と捉える観点を追究する。

こうした観点の追究のために，本稿では以下のような作業を行なう。詳細は次節で示すが，表現物および表現主体と，それらをとりまき，表現過程に影響をあたえるとみなされる要素（これらは表現過程を説明する上で必要な要素である）を列挙し，「表現過程」の記述のための枠組みを構築する。

このように，情報メディア形成過程と表現過程とを互換的に考えるのが本稿で検討する観点である。このため，「情報の流通を可能にし，情報伝達の媒介になるもの」を情報メディアと呼び，その形成における表現の問題を考えると議論に混乱が生ずる。そこで，以下では情報メディアという語を用いず，「表現物」という語で言い換える。同様に，情報メディアが作り上げられていく過程を「表現過程」と呼び，情報メディアを形成する主体の所作を「表現行為」と呼ぶ用語法をとる。

B. 方法

上記で求めようとする枠組みは以下の手順で準備する。まず表現という語の語義を調査し，レトリック研究および表現学という二つの領域の考え方を検討してその視点の導入をはかるという手順である。

1. 表現という語の語義の調査手順

表現過程とはどのような過程であるか考察する前に，表現の概念を整理する必要がある。

表現という語は日常生活においても学術的な分野においても一般的な用語であり，またさまざまに用いられている語である。そこでまず，表現という語の語義が辞書類でどのように規定されているかを調査する。

一般の語法では，表現過程に関わる人間の行為を指して「表現」という語を用いる場合と，表現過程により生み出される産物を指して「表現」という語を用いる場合とに大別されるが，こうした相異なる語義の整理を行う。結局のところ，「表現過程のどの側面をどのように切りとって「表現」という語で指示するか」という表現過程の捉え方の問題ではないだろうか。

こうした点を考察し，それをもとにして「表現」の概念の図式化を行なうことが第一段階である。

2. 表現に関する考え方：二つのポイント

次に，「表現」を研究対象としている２分野，すなわち表現学とレトリック研究を対象に，その方法を概観する。そして，両分野のアプローチを情報学に導入し，表現の問題に関わる問題を幅広く扱うことをめざして，情報学における表現研究のための枠組みと方法を考えていく。

これらの分野では，書き上げられた作品の中の世界だけに注目するのではなく，また，文学作品などを生み出すといった創造の過程にも分析の観点を持っている。そして，その過程に注目する際に，プロセスの段階をただ順に追うのではなく，「なぜ，その表現過程が始まり，遂行されたか」また，「なぜ，ある段階である表現がなされたのか」という点を強調する傾向にある。本稿ではこの点を評価し，これらの分野のアプローチの中で情報学にとって有意義であると思われるものを探る。「なぜそのようになされたのか」といった「表現行為の契機」となるようなことに関して，レトリック研究の中で，特に「動機」をキーワードとして中心に据え論じているものなどに特に注目していく。

また，表現学やレトリック研究では，たとえば学術論文も小説も「ジャンルのひとつ」あるいは「文章の一種」と捉える視点[1)2)]を持っている。このような観点も意識した枠組みにおいては，表現物がどのような分野の所産であれ「表現過程」として一括して見ることができ，同一の枠組みのなかで論じていけるのではないだろうか。そ

れは芸術も文芸による作品も，科学的な論文や発表も，「情報メディア」研究の対象として扱っていく立場につながっていくものではなかろうか。

II. 「表現」とは：語義の調査からみた「表現」

A. 語の使われ方からみた「表現」

表現という語の使われ方をみていくと，様々な場面，用法で用いられる。それは人の行為に関することや，その動作によって生じた結果に関して述べられる時に，そのことがら（行為）そのものや，あるいは単に見て取れるうわべの様子を指したりしている。

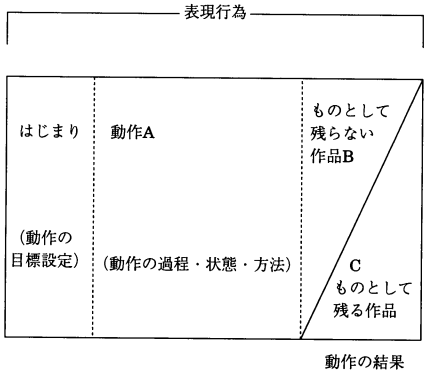
一般的な語義は，『広辞苑』（第4版）によれば“心理状態・過程または性格・志向・意味など総じて精神的・主体的なものを外面的・感性的形象としてあらわすことまた，この客観的・感性的形象そのもの，すなわち表情・身振り・動作・言語・手跡・作品など”となっている。また，『日本形容詞句辞典』[3] から，用例をいくつか挙げると次のようなものがある。“おどろおどろした表現”“シンボリック（象徴的）な表現”“みずみずしく新鮮な表現”“思うことがいいつくせぬ舌足らずな表現”“奇をてらった表現”“サイケデリック（幻覚的な）表現”などである。

一方，著作権法では著作物に関する“思想又は感情を創作的に表現したものであって，文芸，学術，美術又は音楽の範囲に属するものをいう”という条文のなかで表現という用語を用いている。人間の創作活動を表現ととらえている例である。つまり，役者の演技や美術的な造形，文芸作品などすべて表現という活動と見ているわけである。

この場合その演技が“おどろおどろし”ていたり，美術的な造形による作品が“サイケデリックな”ものであったりするわけである。このような場合には，表現という活動にともなう技法や様式を指して使われているのである。つまり，表現ということばは，栗原[4]も指摘するように，行為を表すのと同時に，所産も表すことばであり，行為にも所産にも「表現形式」「表現方法」などを含意しているといえる。このような点を考慮して，表現ということばが使われたとき，表現の何に対してのべられているかを図示した（第1図）。第1図を説明すると以下のようになる。

A. 動作が始まり終わる点までの過程。時間の経過。

B. 演劇や音楽演奏のように，「物」がのこらないもの。動作の状態/過程と結果が同時の場合とがある。



第1図 用例からみた［表現］

C. 動作の結果。絵画作品や記録物のように物として，動作の結果が残る場合。動作と結果を切り離して物理的に保存できる物。

Aの過程には動作の状態・状況，動き方，方法を見ることができる。B, Cでは，見た目の様子，様式や形式などが見ることができる。

B. 辞書の記述に関する調査

ここでは，表現の語義と概念について検討し，表現とは，何をすることか，何か，ということを明らかにしたい。なお，日本語では表現という語が多様な用いられ方をし，曖昧になるので，整理のために表現と訳す事ができる英語を通じて検討していく。同じように表現と訳されても，少なくとも語形で動詞と名詞の見分けがつき，しかも同義語との使い分けが客観的に見られる（辞書には人々のものの分け方に関する共通理解，習慣といったものが反映されていると考えられる[5]）と判断し，以下にあげる英単語と辞書類を使用する。表現という訳語が与えられている英語がいくつかあるが，調査する語として一般的な expression, representation, presentation の3語およびその動詞形 express, represent, present を対象にした。また，使用した辞書は次の通りである。

(1) *Oxford English Dictionary*（第2版）

(2) *Webster's New International Dictionary of the English Language*（第2版および第3版）

(3) *Longman Dictionary of Contemporary English*（第2版）

(4) *Webster Essential English Dictionary*

(5) *Roget's International Thesaurus*（第4版および第5版）

補助的なものとして『英語イメージ辞典』[6] を参照した。

方法としては，まず各辞書の記述を書き出した。次に付録1に示したように，類似した要素をまとめて列記し，各語について以下のように整理した。なお，ここで行っていることは，各語の区別を目的としたものではなく，表現と訳せる語の，異なる部分と共通の部分両方を描き，最終的に表現の概念の全体を見ていこうとするものである。

1) express と expression

express は「中から外へ押し出す (press out)」と「思考や概念などをことばや記号で表す」というのが主要な意味である。前者はより抽象的な意味で express のさまざまな用法において作用しているニュアンスであるが，後者の「ことばや記号で表す」というのが，表現を説明する上では，より直接的に述べているといえる。express される対象は，直接見たり，触れたりできないところ，つまり何かに隠れているような，たとえると頭や心の中に「ある」もので，express される事によって体外に知覚できる形を持つ事ができる。つまり，記号や造形によって「描いたり」，「描写」する事によりその形が現れるのである。「彫刻をする」「絵画を描く」というような場合，題材とした対象と同じようなものを，別の素材で似せてつくるという側面がある。しかし，歴史的な面からみると，　物質的な物を対象とした　sculpture, drawing, painting といった express の用法は廃れつつあり，抽象的な事柄を造形的に，あるいは図形的に表すという際に express の概念が生きている。express の主要な意味は「とくにことばで描写する」ことである。意味，意義，目的，意見，考え，感情，性質といった物理的な物，物体でないものを対象として，「ことばで表し」て明らかにするということである。さらに，前述した「中から外へ出す」という事とも重ねて検討すると，実体の見えない物を，何らかの「外的な証拠となる物 (external token)」にする過程を経て，見えるもの（知覚できるもの）にすることであるということがわかる。expression は「express すること：action of～」「express する過程：process of ～」を意味し，また，「manner of～」「phrase of～」のように，行為の過程に見られる様子，状態，状況について用いられる。

2) represent と representation

多くの用法，意味が述べられているが，各辞書に必ず記載のあったことがらをまとめると，次のようになる。

1. 明らかにする，明らかな状態になる。属性や性質などを記述や描写によって表す。または具現化すること。express に通じる概念。

2. 明らかにして示す事。発表や公表 (exhibit, display) をする事。具現化された物は，他者に提示する事ができる。すなわち，他者に対して明らかにする，という目的が含まれた行為と解釈できる。

3. 再現する。具体的な例を示すと，舞台で劇のある役柄を演ずることや，音楽の演奏をすることなど，繰り返し目の前に繰り広げる事ができる。

4. 象徴する。例としては，旗が国家を示す。

5. 代表する。例としては，議員は市民の代表である。

6. 例示，標本，実例を供す事によって示す。

上記からいえることは，represent とは，表すべきある対象を，そのものによってではなく，代替する何かで示すことである。つまり，「ある者に対して，ある媒介，ある方法によって，ある事（もの，現象）を明らかな状態にする」ことである。他者に提示可能な状態にするために，represent するのであり，それにより伝達やコミュニケーションが前提となった（意図的な）行為であるという一面をもつといえる。とくに，3～6 に注目すると「あるものを表す」仕方が，いくつかのパターンに分かれることが見いだせる。表す対象になる事を仮に A とし，表された結果を B とすると，A と B は同じものではないが，よく似たもので示す（類似化），同等の，あるいは同価値のもので代用，代表する事によって，A を提示するのと同じ意義を持つような B の提示が行われているということなる。

representation は，「～（する）ということ」「～したもの」という二相の記述がなされる。表すという行為の結果としての産物，すなわち表現物が実際の物理的な形のある，あるいは具体的に表された結果そのものを指すときがある。

3) present と presentation

大きく2つの概念からなる。それは，ものを贈呈する概念と，公に示す，つまり，自分（のもの）か他のひと（もの）を自分以外の（他の）人・大衆の前にあらわす「紹介」や，なにかを発表する，披露するという公表を前提とした概念である。

同じように他者への提示を前提としている represent と異なる点は，何かを何かで表すという過程が含まれていない。つまり，表現の対象そのものを提示するという意味合いが強く，「意見をことばで表す」というような，

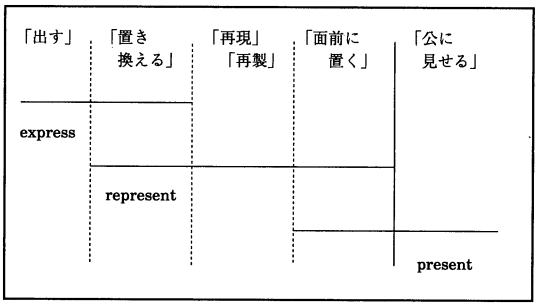
手段や媒介材料を用いた変換過程が，あまり意識されない。「今，ここに」明らかにする，ということが中心的な意味となる。presentation は，提示，紹介，説明の意味があり，眼の前へ表す，視界の中に入れさせる，現実のものであらしめる，という概念を含んでいる。とくに公に見せることを目的としているか，何かの目的の為に提示することをいい，またその状態をさして使われる。しかし，形を変えたり，なにか別の物に置き換えるという過程は，意味の範囲外であり，正式な発表の場であるとか，儀式的な場であるとかといったような，提示の場の性格が，presentation の「公に見せる」という意味に深く関わっている。

これらの語の相違点としては，各語ともに意図的・目的をもった行為であるという側面を持っているが，同じ目的ではない。どういう点で異なるかというと，たとえば，以下の点である。express は「見える状態にする」ということに主眼があるが，represent, present は「表したものを他者に見せる」という伝達の目的がある。さらに，present は「広く公に提示することにより，説得したり，説明する」という目的を持っている。

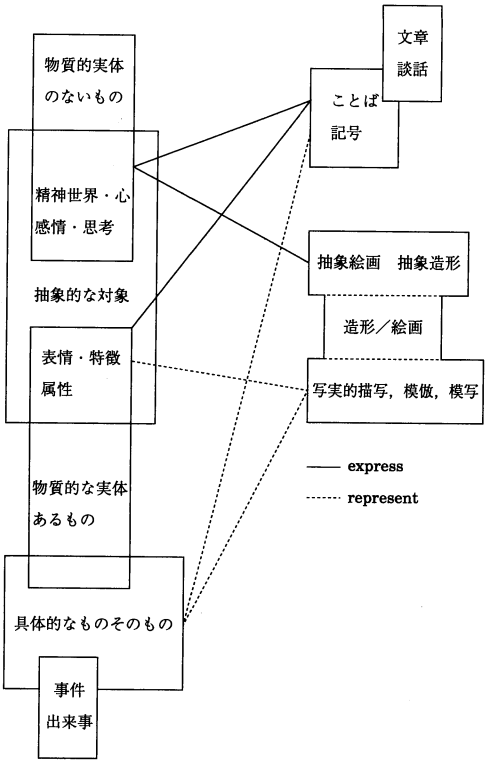
これらの語における共通点は，表現とは，その対象となる事物を人（表現主体）を通じて別のものに置き換えて（または何らかの媒介によって），他者あるいは自身が見ることができる状態にする，ということである。present の説明では「置き換える」という概念が薄いと指摘したが，表現の対象それ自身の物理的な側面や素材の変化，あるいは置き換えはなくとも，見る側にとって表現主体が介在するということにはかわりない。見る側（受け手）にとっては，表現によって見せられるわけで，ただ偶然見る・出会うということとはべつのことである。

これらの 3 語 (express, represent, present) は，共通の概念を持ちながら，一方でそれぞれの語が概念上で個別の役割を保っていることがわかる。この関係を模式的にあらわすと第 2 図のようになる。また，represent と express の共通部分について，「対象となることがらを何かで表す」という関係を第 3 図に示した。

第 3 図上での，表現の対象を何かで表すということを，「置き換え」または「変換」とみると，何か物質的なものの属性や，現実の事件などをことば（記号）や図などの記述される世界への「次元変換」や，実際の物を別の素材で復元したり，模造したりする「形質変換」の過程と見ることもできる。



第 2 図　express, represent, present が指示する範囲



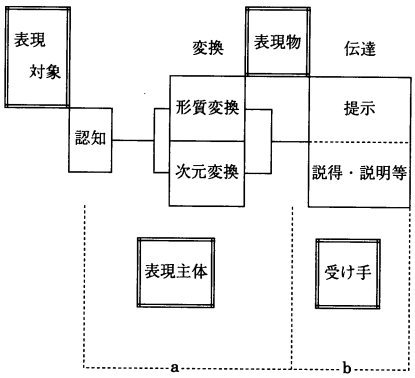
第 3 図　表現対象の対象と表現物の関係

表現の概念について，明らかになったことをまとめて，表現過程を図示したのが第 4 図である。第 2 図，第 3 図でも示すとおり，表現にはまずなにかの形に表す，知覚・識別できるものにすること，「形にしてみせる」という行為の流れがあることがわかる。この段階は第 4 図中 [a] で示している。さらに，他者に対して明らかにする，人に見せるということに集約することができる。この段階は図中 [b] で示している。

表現過程は上記のような段階の連続体であると考えられる。そしてこの過程について「誰が」「何を」「どうする過程か」という説明をするならば，表現過程の構成要素として含まれるべきいくつかの要素があげられる。すなわち，表現の対象，表現する人，表現のための手段・媒介，表現物，表現物を見せる相手などである。これらの要素を(ア)〜(オ)に示すような関係付けができると考えた。そしてこれらの要素を表現過程に配置したのが第4図である。図中，表現対象，表現主体，表現物，受け手という表現過程の構成要素を＝線で囲んだ。

（ア） 表現対象と表現主体
（イ） 表現対象と表現物
（ウ） 表現物と受け手
（エ） 表現主体を介した表現対象と表現物
（オ） 表現物を介した表現主体と受け手
（カ） 一連の過程で参与するすべての要素の関係：
表現対象—表現主体—表現物—受け手

[a] [b] の段階での「形にしてみせる」「明らかにする」



第4図　辞書の分析からみた表現過程

という表現主体の行為を実線で囲んだ。実線で囲んだ部分を具体的に言うと，変換の部分であれば文章にする，絵を描くなどである。また，伝達の部分については，展示する，話す，聞かせるなどが例である。

なお，第4図中「認知」とあるのは，表現対象と表現物のつながりを考慮して図中にいれたが，表現に関する辞書の記述には，とくにこの点に関しては言及はされていない。しかしながら，「〜を表す」という辞書の記述があるように，表現の対象となる事柄を表現過程に欠くことはないといえる。したがって，表現主体の表現の対象との出会いの段階，つまり表現主体が表現の対象を取り上げる段階が，表現過程の起点として考えられる。そこで，その段階をここでは表現主体による表現対象に対する「認知」として，第4図中に示した。

第4図で示したような過程や関係成り立つための要因，条件は何であろうか。またそれを探るためにはどのようなアプローチが可能となるのか。次章では，以上で示されたような表現に関わる問題を扱う領域における考え方を検討していくことにする。

III. 表現研究について

A. 情報学における表現に関わる研究

表現という語をキーワードとして，またタイトルに冠して，中心的なものとして扱った研究は図書館・情報学の分野では余り多くはない。

Foskett[7] は，情報の表現 (presentation of information) が情報学 (Informatics) において主要であるにもかかわらず取り上げられなかったことを指摘し，コミュニケーションにおいて重要なポイントであることを強調した。なお，presentation of inofrmation という用語について，明確な定義はなされておらず，訳として安易に「情報の表現」という言い回しを用いるのは適切でないかもしれない。少なくとも研究成果などを流通させるための，提示可能な状態へ変換した物（表現物つまり情報メディア）について，方法や形式を議論しているので，presentation of information は「情報メディアにおける表現（記述）の方法と形式」といった意味にとればよいであろう。

Foskett は，著者は自分の業績が価値あるものと認められるためには，読者の心の中に著者の思考の構造を再現するのに，最もふさわしいと思われる方法で表現しなければならないことを主張している。そしてその際には合理的な手段を用いるべきであり，そのために意図的に受け手の心理的な状況を研究することが必要であると指摘している。表現の形式 (form) として，抄録，レビュー，研究動向の概観，引用索引，書誌をあげている。そして情報サービス，図書館サービスの成功にむけて，利用を意識した記述のあり方をのべている。しかしながら Foskett の論述では，議論の対象が図書館の資料に特化したものであり，表現の過程や利用者の意味理解にふれてはいるが，深く言及はされていない。どちらかといえば，できあがった「物」重視の視点であるといえる。

Ennis[8] は，報知的資料 (infomational material) の表現とデザインについて 1980 年までのレビューを行って

いるが，それによれば情報の表現についてのアプローチは3つの下位領域に分けている。

(1) 印刷された語の見やすさ (legibility)
(2) 図表などを含めた資料 (illustrative material) の利用と表現 (presentation)
(3) 読み安さ (readability) や語法の適切さ：読者の理解に関係する

また，"journal design" として学術雑誌の編集についても概観しているが，それによれば「行間が何ミリか」といったような議論が主流であった。Ennis の観点からの presentation とは（おもに学術コミュニケーションの為に）書かれたものの視覚的な，つまり見た目についての研究に焦点を当てたものであった。

書かれた（表された）ものの表面上の視覚的な効果に主な関心がある動向は（直接的には引用関係は見られないが），Orna らの情報デザインへのアプローチ[9]に通じていると考えられる。Orna らは情報デザイン (information design) という用語を用いて，広義には，他人や自分がその目的のために，思考 (idea) を目に見える，視認できるようにすることと定義づけている。Orna らは人類が，思考と知識を反映し，それらを時間と場所を越えて伝えるための，脳を越えた情報の蓄積の方法を模索し，視覚的な人工物つまり "外的な情報の容器 external cont ainer" を創造してきたことに着目した。そして，そこに蓄積するということが人類独特の行動であると述べている。この蓄積方法に関して，視覚的な構造化という問題を取り上げ，伝統的な活版印刷から電子的な写植による表現の方法や形式を概観している。そこで情報の概念的な組織化とその視覚的な構造化との関連付けと，それによる情報デザインの必要性を強調している。また情報のデザインが情報伝達の大きなポイントであることを指摘し，それに関する人の認知的な研究の必要性にもふれている。

また McArthur[10] は，知識の表現および提示に関し歴史の展望をおこなった。そこでは知識の表現において相互作用しあう3要素である技術，技法，内容についてコミュニケーションの歴史的な変革との関連を述べている。またその3要素に共通する進展に関してレビューし，(1) presentation の為の技術，(2) Popper の3世界モデル，(3) 知識管理における一般概念，(4) Waler Ong の「第二の音声」という概念，(5) 神経生理学と人工知能，(6)「意味」の問題という研究領域に結び付けている。しかし，表現過程の人の行動としての側面はあまり強調されていない。

伊藤祐三[11]は情報の生産・利用・管理に関する言語学的，哲学的研究のなかで，「思考空間」や「情報の圧縮」といった用語を用いて認識の伝達過程を「表現と理解の過程」としてとらえている。すなわち「思考空間」とは対象→概念→表象という過程を通して現実の世界を反映した人の頭のなかの世界であり，表現とは表象である「思考空間」を概念化し，言語に変換する過程を指している。そしてこの変換の過程において，認識を減少させることなく表現それ自体を減少させることを「情報の圧縮」ととらえており，このことを index, abstract という用語によって説明している。伊藤は「人的な過程」に目を向けてはいるが，とくに具体的なある人の行為やある情報メディアについて述べるのではなく，概念的な側面を重視している。具体的に，たとえばある研究者の研究と成果，それの発表手段の選択や，そこでの内容の順序や組立，図表で表す物はどうするか，といった過程全体を考えていこうとする立場では論述がなされていない。

武者小路[12]は情報の圧縮化へのアプローチにおいて，原著論文と抄録を対象に，すでに情報メディアとして形成された両者の表現上（つまり書かれたものの状態）の比較を行ない，両者の関係にみられた現象について，語の脱落，言い替え，整理，付加，視覚情報の記述化，引用文献の処理，抄録の特徴的なスタイルといった事柄をカテゴリー化した。また，原著論文とレビューの表現上の比較を行い，2種類の情報メディア間にみられる記述上の差異を情報の圧縮化として分析している[13]。これらの研究は，2種類の情報メディアという，客観的にとらえることのできる表現物，しかも文字や記号，図表といった同じレベル（の表現媒体）で構成されているものを比較する事により，ことばがどう選ばれたか，どのようにまとめられたか，といった表現過程の「軌跡」ともいうべきものがとらえられているといった点で，評価することができる。また，レビューに関する研究[13]の中で，レビューに提示される評価の中には，レビュー作成者の知識の陪審員としての立場と，確固とした自分の立場をもつ研究者であるという釣合がはかられている，と指摘している。そしてこの釣合を決定づけるものとしてレビュー作成者のレビューという情報メディアに対する認識，意図，執筆状況，読者像などがあるといっているが，このことは，これらの要素がレビューの表現過程に大いに作用し，表現物としてのレビューに反映すると考えられていると解釈できる。さらにこの武者小路の研究で

は，このことを検討する必要が示唆されているが，まさにこの視点が，本稿の観点に通ずるものであり，以下に述べていく表現学，レトリック研究のアプローチとも共鳴する点であるといえる。

B. 表現学およびレトリック研究におけるアプローチ

1. 表現学：書き手の意図の実現としての表現

表現学は，日本の文学研究の中から派生し，ドイツ流の表現学が表現の技巧の発達に対する研究であるのに対して，「表現とは如何なることか」とういことに主眼を置いている。

まず，“主体の表現行為の過程はブラックボックスである。そのブラックボックスがどうなっているか，それを解明しようとするのが表現学であると考えていい”[4]と規定されている。つまり，表現されたものと表現する主体を関係付け，それがどのような関わりを持ち，どういう過程と方法によって行われるか，さらに表現されたものの効果というものが考察の対象となっている[2]。

表現学は根本姿勢として，表現を「意図的行為」と捉える立場を強調している。特に今井[2]は，「驚いて思わず声がでる」というような“感情が自ずと外に表れ出ること”は「表出」であり，表現学の対象としていないことを強く主張している。また，表現を説明する際に express という語が用いられることに関して，今井は“「表現」と「表出」は区別すべきである”という主張の中で，“express という語には，「表出」の意味が生きている”と指摘し，だからといって，express および expression という語を用いることで，表現と表出とを同一のものとして扱うわけではない，と再三「表出」が表現学の対象ではないと述べている。なお，実際には，表現学における研究論文の英訳タイトルに，expression という語は使われているし，表出という語を用いて表現過程が説明される場合もある。今井の用語である「表出」以外では，たとえば小松は，“表現過程が「自己の観念を言い表し（表出行為）」「聞き手に伝える（伝達行為）」からなる”という説明に「表出」という用語を用いている。この場合でも「聞き手に伝える」という目的の達成行為としてという側面があるので，連続する前部分の「表出行為」も無意図的なものではないと考えられる。したがって，たとえどのような用語で表現過程の一部を切りとったとしても，意図的な行為とみなして表現過程全体を考えるという表現学としての立場は，貫かれているといえる。

表現学では表現を意図的な行為として取り上げるが，それにはある目的のために表現がなされるという考え方の裏打ちがある。めだって強く「意図」と「目的」の意識的な区別がされているわけではないようだが，使い分けている研究もあり，説明上区別した方がよい場合もあるので，ここで整理しておく。

まず，意図という用語が，意識とほぼ同義で用いられる場合[1]があるが，おもに表現が「おもわず～する」行為ではなく，「意識的」な行為であることを意味しようとするものである。また，「意図的な表現」という使われ方が見られるが，この場合，想定されるある目的の達成のために，効果や影響を予測し，上手くいくために戦略やもくろみとして，表現の仕方を操作する，このはたらきを「意図」ととらえているようである。つまり，表現について，「どのように」に作用するのが「意図」，「なぜ表現するか」の答えとして「目的」という語が用いられていると考えることができる。そして，本稿においてもその区別に従うことにする。

さて，目的のとらえかたとして，今井[1]は次の三つを挙げている。

(1) 自己表現のために
(2) 自己形成のために
(3) 自他交流のために

今井の言う (1) と (2) は表現主体と表現過程の関係への言及であるが，とくに表現によって「達成すべき目的」というものを意識した記述にはなってない。(3) では伝達という目的達成のために表現するというようにいえるが，(1) は表現それ自身が表現の目的である。しかし，いったん文章などに形作られたものは，他者へ提示することができる。よって読み手が表現主体の自分自身であるとき（自己確認）もあれば，他人への自己主張となるときもある。読み手を意識するか，想定するかで (1) は「伝達」という目的をはらむのである。(2) は「意図的な言い表し」を行うことの，表現主体にとっての効果に意義があるとみるにとどまり，「なぜ表現するのか」という問の完全な答えにはならない。今井の記述の範囲で考えるならば，文章を形作る，そのために構成する，推敲する，練り上げるという過程を表現の過程とみるとき，自分や周囲をみつめたりすることが，「自己形成」にもつながる側面として見ることができる。

このように今井は (1)～(3) の 3 点を挙げているが，この一元的な列記だけでは目的に対する全ての考え方としては不十分である。必ずしも表現によって行おうとしていることと，表現そのものとが，ただ一個ずつ一対にな

るとは限らない。つまり，今井の(3)自他交流という目的にしても，ただ伝達すること自体が目的の達成なのか，たとえば最終的には伝達によって相手の同意を得ることが目的となるような，伝達することによって達成する目的がさらにある場合である。

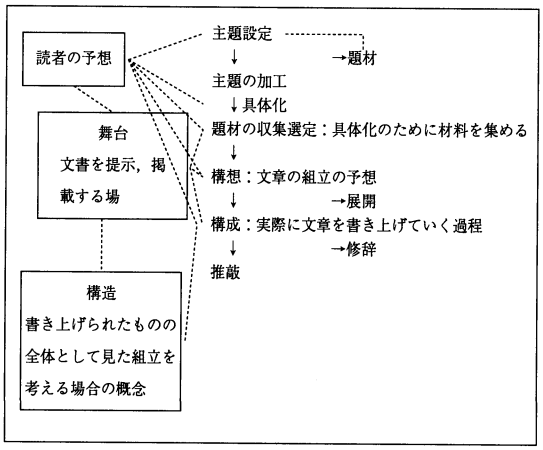
そういった場合については，目的の階層といったものが考えられる。それは，設定された最終的な目的と，今まさにしようとする，あるいはしていることをやり遂げるという中間目的，その行為の結果として，あるいは成果として出来上がった作品の「かたち」が達成することのできる目標，といったような階層である。

このような目的の階層という考え方について，たとえば，「研究者の生産性をあげる」といった，図書館・情報学になじみのある例をもとに展開してみると以下のようになる。研究者がある研究を行い成果をあげたとする。しかし，それだけでは業績として認められない。成果は発表されて業績として公認されていくものである。そこで学術論文という形式で公にするとしよう。書くという表現行為は，研究成果の記録が目的と考えられるし，同時に記録されることによって発表が可能となる。発表され認められれば，業績として公のものとなる。業績の獲得が最上位の目的とするなら，論文の発表が次の階層に，さらに論文の発表のために論文を形あるものにすることが，研究直後のまさに書き始めようとするときの最下位の目的である。なぜ書くのか，という説明をするならこのような段階で目的をとらえることができる。

さて，目的達成のための行為とらえることによって「なぜ表現するのか」という問に対する答の多くを「目的」の中に見いだし得る可能性が生ずる。しかし，「いかに遂行するか」，「なぜ，そのように表現するのか」「いかにして表現するのか」という問に対しては不完全である。どのような意図・意識があるか，またそれらがはたらく過程を，どのような過程として見ていくかという視点をさらに持たなければならない。

そこで次に，表現学における表現過程のとらえ方をみていく。

永野[14]と林[15]の表現過程に関する記述をもとに図式化すると第5図になる。これらは，ある文章作品の形成過程に注目したものである。特に永野[14]は文章表現を，ひとの行為の側面と，必要とされることがらの関係とをみながら文章表現の全体を記述している。つまり発表の場が決まると，それに関連して読者の層が予想される。新聞のエッセイではとくに学者や専門家を中心に考えるのは不適当で，一般大衆，平均的社会人を読者として予想する反面，その中に，専門家が混じっていることを意識し，学術専門著書を執筆する場合などは同じ分野の研究者や，その学問を学んでいる大学生を想定して書かれる。このように，読者の予想という制約のもとに文章表現がなされる。



第5図　表現学にみる表現過程

ここでいえることは読者の予想と舞台（発表の場）は，連動して表現過程に作用する制約条件であるといえる。そして，ことばの選び方一つにしても，そのことが作用することは一目瞭然である。たとえば一般大衆向けには難解な専門用語は安易に用いたりせず，理解を得やすいようにと（つまり意図的に）噛み砕いた言葉遣いをするであろうし，専門家むけにはあまりそのような努力はしないと考えられるのである。

さて，表現学が対象としているのは，おもに文章表現についてであるから，上述のような構想，構成過程を経て表現行為の結果得られたものは文章である。表現行為の所産としての文章を，表現過程の反映であるとみなす考え方もある。表現学の経緯として，実際には分析する文章の対象が文芸・文学が中心ではあるものの，とくに表現研究の対象としては，文芸的表現も科学論文のような表現も，ジャンルの一つととらえる姿勢である。大変大まかな分類であるが，今井[1]によれば文章は次の三つに分けられる。

(1) 日常的文章　手紙・日記・種々の報告など日常生活に“必需的な文章”
(2) 文芸的文章　詩・小説など，文芸作品
(3) 科学的文章　学術報告・論文など，学問的文章

これらは「形式」によって区別される。つまり詩には詩としての，学術論文には論文としての「かたち」ともいうべきものがある。形式はスタイルともいう。手紙や日記の形式で書かれた文学作品，小説などがあるが，この場合は形式による文学的効果をねらっているのであり，手紙や日記の本質的な機能とは異なる。

また，たとえば，学術的な報告を詩の形式で書くことはないように，形式による効果をもとめられないものもある。つまり内容を構成する要素が本質的に異なるものは，形式の流用はしがたい[1]。また論理的文章と芸術的文章では，構成の仕方，叙述の仕方が両者それぞれの特徴が明確に異なるので表現全体にとって形式は大きな役割を果たしていると言える。

このように，表現過程をみていくと，そのなかにいくつかの要素が含まれ，また互いに関係し合っていることがわかる。あることがらが，文章（作品）として形成されるには，表現過程のなかに含まれる要素として，まず，不可欠であるとされる目的・意図[16]，そして作品の対象となる読者，発表の場，書かれる内容，主題（思想，内容），表現主体，ことば，文字など，次元も属性もさまざまな要素を列記することができる。

2. レトリック研究とスピーチ批評

表現学は主に，書くという表現行為や，文章を中心に表現過程をとらえようとするものであった。これに対してレトリック研究は，書くという表現行為に限定せず，ことばによる表現のさまざまな側面に焦点を当てるものである[17]。レトリックは修辞または修辞学と訳されているが，狭義の意味でそれが用いられる時，文体の修辞を指し，伝統的レトリックにより近い定義で用いられ，表現の技巧に主眼をおいたものとなっている[17]。しかしここでは表現技巧の問題に限定せず，拡張された現代レトリックの範囲を取りあげる。「拡張された」とは，以下のようなレトリック研究の歴史的発展経緯を根拠としている。

従来の意味でのレトリックは，古代ギリシャより19世紀後半までヨーロッパに継承されてきた「効果的な言語表現の技術」のことをいう。もともとは，文法学，論理学と並ぶもの（弁論術）であった[17]。古代のレトリックは「説得する表現の技術」「芸術的表現の技術」の2つの役割をもち，アリストテレス以降近代まで継承された[18]。20世紀にはいると内容主義の言語観（重要なのは内容であって表現形態ではないとするもの）によって，伝統的なレトリックは衰退する。しかし，これは大きな誤解を前提にしていたとの“反省（内容は表現をはなれて抽象的に存在し得るものではなく表現は内容を形作る本質的な側面であるという再認識）がなされ”[17]，それは現代レトリック研究の発達の重要な契機となった。また，特に米国での1930年代以降のレトリック復権は，社会問題，人種問題国際関係などが複雑多岐に渡っていった社会状況を背景としており，そうした中で現代レトリック理論が構築されていった[19]。川島，岡部らによれば，20世紀の理論家の間で見られる共通点は，“人間関係，国内・国際関係での理解を増進し，諸関係にみられる分割，分裂，割れ目を修復し，改善する積極的な手段を受けとめていること”である。つまり，“言語の正用・誤用方とその理解，改善こそが，人間関係の向上の鍵であるという社会学的な視点を彼らが持っているということである。現代レトリックは，社会の一員としての人間を考え，言語や記号をコミュニケーションの手段であるばかりでなく，人間文化の根拠としてとらえる。そのことにより，レトリックは，単なる技巧の問題ではなく，“人間の言語，記号的認識の動態の探求をめざすもの”[17]であると定義されている。

現代レトリックでは，真実は複雑多岐にわたるものであり，コミュニケーション参加者すべてがともに追求するものだと考えられている。伝統的なレトリックが，話し手中心の視座をもち，説得―影響―効果という線的なモデルを中心にすえた，話し手絶対主義（話し手が聞き手に真実を伝達する）であるのに対し，話し手・聞き手が，相互依存的，社会調和の関係であるとする考え方が，主流を占めるものである。現代レトリック理論のなかには，I. A. Richards や K. Burke などによって確立されてきた，人と人との間のコミュニケーションの一形式として，レトリックをとらえるという考え方がみられる[19][20]。

Burke の理論は社会学，心理学にねざすもので，とりわけ「人間の本質」というものに注意を払うべきだと主張している。まず彼自身の人間観は次の2点にまとめることができよう[20][21][22]。

(1) 人間は社会心理学的な動物。人間はシンボルをとおして自己表現をする。演劇的比喩のなかに人間の本質が現れている

(2) 階級組織の精神に駆り立てられる，秩序感に動かされている：対人，グループの人間関係のなかで人間は自己と自分の世界との社会的なバランスをとりながら地位を求めつつ生存をはかる。

この人間観にもとづいて，言語活動の解明のための方

法論を確立しようとした。Burke はレトリックを，世間一般でいうところの美辞麗句ではなく，言語発達の観点からみても重要な位置をしめる人間固有の活動であると考え，“レトリックは言語自体のもつ本質的な機能，すなわちシンボルに反応する人間の心の中に，言語により象徴的に協調心を呼び起こすことにより深く根ざしている”[19] と述べている。コミュニケーションを，“訴求(appeal) の目的の為に言語・シンボルを使用する行為である”とみなし，この訴求行為を，言語の持つレトリック機能と呼んでいる。コミュニケーション成立のための要素は，話し手，スピーチ自体，聞き手であり，訴求過程を通して聞き手と一体になることが目的である[21][22]。

Burke の理論のうちもっとも重要な概念に劇学の 5 つの要素 (dramatistic pentad[22]) がある。この概念は，言語状況に反映された人間の行動，特に人間の「動機」の批評的分析モデルの役割を果たすものである。

(1) act 行為　(2) scene 場面あるいは背景
(3) agent 行為者　(4) agency 行為手段
(5) purpose 意図あるいは目的

この要素を互いに組み合わせ，分析批評モデルとして用いている。組み合わせには以下のものがある。

行為-背景　行為-行為者　行為-行為手段
行為-目的　背景-行為者　背景-行為手段
背景-目的　行為者-行為手段　行為者-目的
行為手段-目的

これは，Burke が，スピーチやレトリックを批評するために，というよりは思考や行動の形をとって生じたもの，すなわち「行為」を描写，分析するために用意したものであり，その行為のもととなったさまざまな「動機」を論ずるためのものである。つまり，

> いま，ひとがなにかやっているとする。そして彼が何をやっているのか，そしてそれをやっている理由を述べなければならないとする。そのようなとき，どのような要素が説明の中に含まれてこなければならないのだろうか。[21]

という問いかけに対する答になるわけである。

さて，実際にレトリック的アプローチをとるスピーチ批評というものに目を向けてみると，表現学の「書く」にたいして「話す」という表現の分析についてよい対照ができる。両者は，表現の過程に伝達すべき相手が，同時に存在しているか，否かという点が大きな相違である。しかしながら，実際に分析していくための視点というものに，大きな違いはないように思われる。なぜならば，スピーチの批評家は，スピーチ（表現物）は，話し手としての表現主体，聞き手（伝達の相手），場所・時間といった直接的な場面，その背景となる歴史的背景などの相互作用によって形成されていくという視点をもって分析に当たっているからである。展開される議論，証明方法，構成などは，表現主体の思想形態，価値観の影響が考えられる。さらに，その影響源となる表現主体の教育的背景，職業上の訓練などの個人的資質というものを分析するという視点をもつ。同様に，聞き手についても，年齢，性別，知識レベル，社会・経済レベル，話し手に対しての態度様式（好意的か，敵対的かなど），などを考察する。そしてスピーチの行われる状況，場面といったものも分析される。これらは，外的要因としての分析対象になっている。また，外的要因に対して，表現の所産となったスピーチの中に見いだすことのできる要素も分析の対象となる。すなわち，言うべきこと（主題）やその選択された論証方法，その形式や構成，語の選択，文章構成，修辞などを内的要因として規定している[19]。上述の表現学とともに，これらの視点は，まさに「表現」へのアプローチの視点として積極的に取り入れていくべきであろう。

C. ま と め

表現学，レトリック研究において，「表現行為」は目的達成行為としてとらえられている。また，「表現」は伝達を目的とするか，あるいは「表現過程」自身が「伝達」過程を含んでいるとも解釈できる。目的達成は伝達の成功，つまり読者や聞き手という受け手に何らかの影響，効果をもたらすことである。換言するとそれは，文学作品に対する感動であったり，スピーチにおける賛同や共感であり，あるいは，受け手を何らかの行動に駆り立てるといったようなこと（多くの場合，これらを目的としている）である。

森岡健二は，「効果」を“受け手の心の中に生ずる表現の結果”[23] とみなし，この「効果」を考察するにあたり，森岡は，“「表現」を発信と受信とのコミュニケーションの過程としてとらえないと「効果」という問題を考えることは難しい”と述べている。コミュニケーションの過程を考察する視座として，(1) だれが（発信者），(2) なにを（内容），(3) どんな手段で（媒体），(4) だれに（受信者）(5) どんな効果で（結果）という点をあげている。これら

の点は，表現学，スピーチ批評でも分析の視点として触れられている。前述したように，現代レトリックの基盤がコミュニケーションにあることからも言うことができるが，「表現」を研究することは，コミュニケーションの要素を考えることでもあり，コミュニケーションを考えるときには，「表現」は重要な視点になるといえる。

以上のことから，「表現過程」を考察するための視点，と，コミュニケーション過程での位置づけを考慮にいれながら，表現過程をとらえる枠組みを構築していく。まず，表現過程をどうとらえるか，を簡単に次のようにまとめた。

(a) 表現は「伝えることがら」の形成と伝達の過程であり，それは意図的な行為の過程でもある。
(b) (a) にたずさわる行為者（すなわち表現の主体となる人）はコミュニケーションにおいて送り手となる。
(c) 表現過程では，表現主体は，受け手への効果を常に意図する。
(d) 表現行為には，受け手への効果の考慮だけでなく，時代背景，社会状況，文脈などの要素が作用する。
(e) 表現物には，表現主体と受け手ので共通認識される，言語，文法や形式で構成されないと，伝達不可能である。共通であることによって受け手への伝達が可能となる。
(f) (a)〜(e) をふまえて形成された表現物が実際に，受け手とのやり取りに使われる。すなわち何らかの形に表されたもの（物質的なものとは限らない）によってのみやり取りがなされる。
(g) 言うまでもなく，「表現行為」は目的達成のための行為であり，それは伝達の成功無くしては達成されない。

次章では上記をふまえて，Burke による「要素の列記という方法で行為を説明する」という「動機志向」のアプローチをヒントとして，要素や要素間の関係の記述という方法のための枠組みを検討したい。そのために基本的な要素や，相互に作用しあう要素の関係を図式化することによって，要素と過程を総合的に考察し，説明するための視座を提示することを試みる。

IV. 表現過程の基本要素とその相互関係のモデル化

A. 基本要素について

第 II 章，第 III 章で得た結果として，表現という行為や，表現過程を構成する上で常に不可欠の要素と目的という前提条件を以下に基本要素としてあげる。（　）内には，表現学，スピーチ批評でのとらえかたから見た要素を例としてあげる。

1) 表現主体（著者，話者）
2) 表現物（文章作品，スピーチ）
3) 表現によって提示されたものを認知する他者，即ち受け手（読者，聞き手）
4) 文脈：表現の場を構成する要素（文章を書いている状況，スピーチ状況，背景を含む），
5) 目的：表現によって達成する最終的目標（感動をよぶ，賛同を得る）

以上を表現過程における基本要素として論じていく。これらは相互にかかわり合うもので，そのつど別個の条件，要素としてなりたつものではなく，たとえば表現主体にとって受け手は文脈との連関でとらえられているし，表現物の形態は文脈にふさわしい物を選ぶ，というように複雑な因果関係にある。まずこれらの要素を個別に検討し，つぎに相関関係を明らかにしていく。

1. 表現主体

表現主体は，表現過程を構成する要素として不可欠な要素と捉えられる。表現主体は，コミュニケーションにおいては，送り手と捉えることができる。

表現主体によって表されたものは，表現行為の成果としてだけではなく，表現主体による表現行為の過程の軌跡と捉えることができる。たとえば，表現の方法は，表現過程における語の選択や配置・構成などの決定の際の，表現主体の意図の反映と見ることができる。また，さらに，意図を働かせるに到った表現主体の内外の作用因を探る事に意義があると思われる。表現主体は「人」であるが，その「人」を決定づける事柄，即ち性格，価値観，思考様式といった要件，またはその人の社会的な属性というものをここでは表現主体の「個人的資質」として考えていく。

まず個人的資質はどのような要素から構成されているか，さらにその個人的資質が形成される際の作用因は何か。こうした考察から，各要素との因果関係まで含む問題を提起することができる。この個人的資質は，その個人特有の精神世界，思想，性格，価値観など表現主体の内面的な要素ととらえられ，職業や職位などの社会的立場，すなわち対外的な属性や役割を外的（社会的）要素と捉えることが出来る。

自分が所属する社会，表現行為を遂行する場面の背景となる社会において，どの様な位置づけであるかという自己確認は，表現過程においては「抑制」あるいは「制御」の機能をはたす。これがはたらく良い例としては，「立場をわきまえて発言する」という例があげられる。表現手段の選択の自由度が高いほど個人的な（つまり恣意的な）選択基準が採用され，「その人らしさ」ともいうべきものが現れてくる。

ここでは，表現主体を表現過程における一要素と捉える手だてとして，人に付帯する要件について，内的要素，外的要素というかたちで提示した。しかし，両者は個別にはたらくのではなく相互に作用しあう要素である。

2. 表現物

表現主体の表現行為を経て産出された，表現物については以下の点から述べる事ができる。

(1) 表現の対象となった事柄との関係から

(2) 表現物とはどのようなものと規定されるのか

まず(1)についてであるが，II章で明らかにした通り表現の主要な概念として，ある対象を表す際に「別のなにかで（置き換えて）」表すということがある。物理的な実体のないものを，何らかの認知できるもので表しめる，あるいはそこにないものを別のなにかで提示するという概念である。このとき表現の対象には様々なものがなり得る。人の内面にある感情や思考であったり，具体的な事物の属性であったり，動物や物体であったりする。それら対象を，ある種の記号や図のようなもの，その他代替物へと変換することにより，目前に提示することが可能となる。

この置き換えあるいは変換について，わかりやすい例をあげてみよう。古代生物である恐竜はもはや生息しておらず実際の姿を見ることは不可能である。しかし復元の展示や，恐竜に関して記述された説明を通して，私たちはそこから「恐竜について」を知ることができる。つまり，ある対象についての表現物は，（実際に）提示されるものであるといえる。

(2)についてであるが，表現物の種類（音楽であるのか，文章であるのかといったこと）を規定し，さらにそのなかでそれらの種類を識別することを可能にする要素は何であるのか，といったことがポイントとなる。表現物を表現物たらしめるのは，表現主体の送り手という立場の自覚や，目的を持った行為から生じたということである。表現物は「思わず～する」衝動的行為から生じたものとは区別される。つまり，表現物は，表すために，あるいは伝えるために，「ことばを選択」したり「配置」したりという意図のはたらきによる結果（または産物）であり，送り手の意志のもとに受け手に「届く」べきものである。

さらに，表現の形式と内容の相互作用という見方があるが，それは以下の2点から見る事もできる。即ち，

a) ある対象を，何をつかって表現したか，あるいは表現物が何で出来ているか。手段や材料。

b) 表現主体はどのように(a)を構成したか，それをどういうアプローチによってとらえることができるか

(a)については，表現物の構成要素として様々な観点からとらえることが可能であるが，たとえば「ことば」の構成を細分化し，音素というレベルで考えるようなことはしない。ここでは表現物の属性を決めるものと考える。文章で表現されている，あるいは音楽によって表現されているというようなレベルでとらえる。その際，(b)について顧みると，第III章でとりあげた分野だけみても，実に多くの用語と方法でアプローチされている。それは文体，形式，配置，形態，流儀，型などに対するアプローチのなかで述べられている。

表現物は，何についてあらわすかという対象と，表現主体の表現意図のもとに選択される表現形態，方法からなる。そしてそれを遂行するための枠組み・形式・様式がある。様式・形式のなかで(a)の要素の選択と配置，場合によっては技巧・修辞がほどこされて表現物は形をなしていく。この過程を，“表現過程は選択作用の繰り返し”[24] と捉える考え方もある。何を表すか，どのような方法，手段をもちいるか，どういう構成をするのかといったことについて，常に選択を迫られた過程であるというとらえ方である。あるいは一つが決まると自ずと決まっていく場合が想定できるかも知れない。また，たとえば依頼原稿のように，あらかじめ与えられたテーマや形式のなかで表現される場合もあるであろう。選択の自由度がどの程度か，それは何によって左右されるのか，選択の背景と条件がポイントとなってくる。また，背景に含まれる構成要素で，作用因となる物は何があるかを考察していく必要がある。

3. 受け手

ここでは，表現主体が伝達の対象として想定する受け手を考える。解釈を表現の再構成の過程とみる考え方

や[24)25)]，特にレトリック研究で考えられているようなコミュニケーションの成否について評価する場合などは，受け手にどう伝わったかは重要なポイントになる。しかし，ここでは，表現主体にとっての表現行為，つまり「誰に」「なにを」「どう伝えたいか」という表現主体の目的を出発点とするので，受け手の理解や解釈と言った観点からは述べない。

表現主体にとって受け手は，目的を説明する上でも「誰に」という重要な要素として含まれる。まず，表現の目的によって受け手が決まる。「何をどう伝えたいのか」，「伝達によって何を達成するのか」ということが，表現行為遂行の上でのさまざまな選択（たとえば形式など）の意思決定に大いに影響する。より妥当な，効果的な結果をもたらす意思決定のために，「それは誰に対してか」という受け手の予測が重要なポイントとなる。表現主体が受け手を予測する際に考え得る要素と，二者の関係をとらえるポイントを以下にあげる。

(1) 特定の受け手：想定した相手について既知の場合知っている度合
  (a) 個人あるいは「どの集団」が「誰」であるかの識別がされている場合。
  (b) 個人か集団か
  (c) 特定層
(2) 受け手について未知の場合
  (a) 想定した相手について知り得る属性は何か
  (b) 想定した相手について知るべき属性は何か
(3) 受け手と自分の関係
  (a) 社会的関係　例：職位の上下，顧客と売り手
  (b) 精神的関係　例：嫌いな相手，尊敬の対象
  (c) 表現の場においての関係
    例：聴衆と演奏者
    話者と聞き手

たとえば，ある研究者が専門的な理論を説明するという際に，それを読む・聞くのは同僚の専門家か，それとも学生に対してかでは，説明の仕方が異なることが予測される。また，同じ理論についての説明でも，新聞に解説記事を書くとなると，その新聞の読者を「誰」かはわかりかねるが，読者層という形である程度可能な予測をたてて，書くことになるだろう。他に，講演をするという場合は，聴衆は○○婦人団体であるとか，何に関心がある団体であるとか，話す内容の組立の手だてとして，受け手が「誰か」ということは，重要なポイントとなる。つまり，誰に対してかということが，表現方法に直接的に作用していると考えることができ，このことは，表現物を分析するときにも，大きな手がかりとなるといえる。

4. 文脈

表現主体，表現物，受け手の相互関係を成り立たせ，それをとりまく要素を考える上で，「文脈」という語を用いて説明を試みる。文脈という語は，さまざまに定義されるが，ここでは，「社会的文脈」という概念により近い意味で用いる。“社会的文脈とは社会行動と言語構造の間に存在する関係を研究するために，考察される社会条件の総体としてしばしば言語使用の「社会的文脈」とよぶ。また「状況的文脈」「状況の文脈」ともいわれる。これは，文化的・心理的状況について発信者，受信者が共通にもつデータであり，両者が各々の経験と知識に基づいて持つものである”[26)]と定義されるが，これを言語以外の表現行為にも適用できる概念へと拡張してここでは「文脈」という語で説明していく。

さて，表現行為が表現主体による受け手の想定を前提としている以上，表現に用いたことばなどの要素や，形式のあり方は，両者に共通理解があることが要求される。たとえば，論文は論文として「こういう物が論文である」と表現主体と受け手がともに認めるような，共通認識が必要である。同様に絵画は絵画として，詩は詩としてということについても，表現主体と受け手の共通認識・理解が必要であろう。つまりそのような共通理解，共通認識が，伝達を前提とした「表現行為」を成り立たせていると考えられる。その基盤となるものとして，文脈というものを考えてみたい。表現主体と受け手の両者の有する文脈が必ずしも一致せず，よって表現物における使用された言語などが共通ならざる場合も当然有り得るであろう。

文脈は，どのような視点でとらえていけるだろうか。文脈の形成の基盤を以下のような方法で検討することを試みた。表現学やレトリック研究では，まず，表現行為の遂行される場面，舞台といったものを設定し，その場面の状況や，背景を描くことによって，それらに含まれてくる要素を記述する方法[14)22)]がある。表現の舞台は，表現が伝達を意図した行為でもあるので，コミュニケーションの成立するための条件を備えた場でもある。それはまた，表現主体，表現物，受け手が相互作用する「場」であるとも言える。「場」をとらえる３つの観点を提示

する。

a) situation: 歴史的・文化的な背景，社会状況
例：スプートニク・ショックをうけた科学技術・情報政策の大転換。バブル崩壊。

b) setting: 表現行為が遂行されるその場の状況。
例：国家元首による年頭教書の発表，場所，日時。

c) scene: 実際の表現行為遂行の状態。
例：観衆が現場で，またTV中継を通して注目しているなかで，元首はスピーチをしている。

また，「場」についての異なる観点を提示すると以下のポイントがあげられる。

1) 目的に関する側面：公式・非公式，儀式的，プライベート。
2) それぞれの要素の背景として描くことのできる側面：国家，教育制度，言語など。
3) 表現の制約となる枠組み：特定のテーマに関する別個の方法，アプローチ，解釈。

「場」によって自ずと決まる要素がある。それは表現主体と受け手，表現物の中にも外にも作用する要素である。つまり，言語や文法のみならず，「絵画とは」「科学論文とは」「演説とは」といったことや，そのテーマ・話題の妥当性についても，表現主体の「ひとりよがりの決まりごと」ではなく，その場においては「共通」であるということである。それが，文脈であるととらえることができる。

受け手もまた「場」における存在である。だから受け手には受け手の文脈というものがある。いつも表現主体と受け手が同時に同じ「場」に存在するとは限らないから，双方の文脈の共通性がなければ，両者のやり取りは成立しない。それは表現物の形式や様式だけの問題ではなく，表現された事柄自身・内容についても同様のことがいえる。「場」の要素は表現主体の目的の背景でもある。社会的必要性や自分の欲求など，何らかの動機を生み出すものが「場」の中にある。ただし，表現主体がその「場」において動機が十分であっても，受け手にとってそれが意味をなさないもの，意義のないことがらであれば，「知られる」ことはあっても，真に「表現の目的達成」には届かない。つまり，表現の題材になったことがらについて，文脈が共通でなければならないのである。

5. 目的

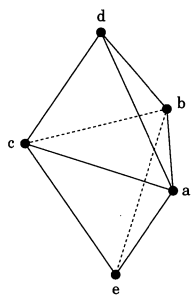
目的については，目的の階層性や，表現行為の前提条件としての目的，あるいは表現の契機となる目的という観点をII章，III章でも述べているのであまり繰り返し詳述しない。「表現は目的を遂行する行為である」という，目的という要素を表現行為の前提条件と見なす立場にあるので，モデル化には必須の要素である。目的は表現行為の始まり，契機をもたらすものである。あるいは動機の最大構成要素であるともいえる。目的は表現によって達成しようとする最終的な目的，そのためにまず行なうべき中間的な目標など，階層的にとらえることができる。また，行為の契機となった目的が自発的か他発的か，ということは，その後の過程の様々な意思決定時の選択の自由度の大きな作用因となる。

B. 基本要素間の関係と表現過程

前節では特に表現主体，表現物，受け手，文脈を基本要素として取り上げ，それぞれについて考察してきた。その際明らかになったことは，どの要素も相互に関係しあっているので，他の要素との関係を考慮にいれなければ，各要素について論じることができないということである。つまり，各要素間には緊密な相互関係があり，その相互関係の上に表現過程が成立するわけである。

そこで，各要素を個別に論じるのではなく，要素の間の関係と，相互作用を表現過程の中で見ていく必要から，これらの要素と要素間の相互関係を図示し，明らかにする（第6図）。なお第6図は立体を投影した図であり，以下この図を基本図と呼ぶ。

基本図は点・辺・面で構成された立体図であるが，この辺や面で表された関係，その関係における相互作用が，どのようにとらえられるか。以下では，可能な説明の例として述べていく。



第6図　基本要素の関係を表す基本図
a 表現主体　b 表現物　c 受け手　d 文脈　e 目的

1. 表現過程における要素の関係と相互作用：基本図の展開

ab を「意図」とみなす。それは，表現主体が表現物を形作るのは，衝動的，無意図的な行為ではない，という考え方を根拠としている。つまり，表現されたものが形式や，技巧，様式などをもつのは，表現主体の表現意図のはたらきによるものであり，だから二者の関係は，「意図」ということになる。

ac は表現主体と受け手の関係を示す。「表現」は受け手を想定した行為であり，その実現は伝達によってなされる。このとき表現主体は，コミュニケーションの場においては送り手であり，送り手・受け手の関係としてとらえることができる。たとえば，教室における授業中の先生と生徒，という関係である。

ad は表現主体にとっての文脈である。同様に bd は表現物の文脈（なお，表現物にとっての文脈 bd とは表現物としての在り様についての文脈を意味する），cd は受け手にとっての文脈を示す。これらは各要素が各々にもつ文脈で，必ずしもすべての条件について一致するとは限らない。そこで，各辺に共通する点 d は，表現主体の文脈，受け手の文脈の共通部分を示し，それが共通の理解の基盤となることを表している。

bc は受け手と表現物の関係を示す。表現物は受け手が実際に見たり，聞いたり（知覚）できるものである。点 b によって示される表現物は，表現主体と受け手の間にあり，実際に伝達することに用いる存在であるので，コミュニケーションの道具としての機能を果たしている。

ae は表現主体と目的を関連付け，表現主体が目的をもった存在であることを意味する。ae は表現主体にとっての目的を示している。

be は，目的と道具（あるいは手段）の関係を表し，ここでは表現物が目的を達成するための道具（あるいは手段）として位置づけられることを示している。

ce は受け手の目的を表している。受け手は受け手自身の目的によって，伝達過程に参加し，伝達されることがらを「受け取ろう」という意志によってこの関係のなかに存在している，とみなすことができる。

abd は表現主体の表現物に表す内容，もしくはイメージの構成過程を表す。表現主体が，表現物に込めようとするものについての表現主体の解釈は，表現主体の文脈を根拠にしてなされるものであると見なすことができる。

adc において表現主体，受け手の相互関係の状態を表すものである。ここでもし文脈を共有しているとするならば，それぞれを独立して考える必要はない。また，文脈がまったく異なるのであればコミュニケーションの可能性そのものが失われる。よって文脈を頂点に，表現主体，受け手で構成するこの面では，ある程度，表現主体と受け手が文脈を共有し，コミュニケーションの可能性を有する状態を表している。

bdc は受け手の解釈の過程における相互関係を表す。解釈の根拠としての文脈があることによって，ただ表現物を「見る」「聞く」のではなく，内容の理解が可能となる。表現主体はこの解釈がいかになされるか，表現の効果を予測するのである。

aeb は表現主体が，目的に照らして表現物の形式や，様式などを選択し構成するという過程での相互関係である。また表現物によって表現方法が左右されるというような相互関係でもある。

aec は表現主体と受け手との相互関係を示すと共に，文脈と同様，目的が完全に共有されるとは限らず，またまったく異なるというわけでもない状態を表している。表現主体の送った目的と，受け手の受け取った目的が一致する場合もあるし，そうでない場合もある。表現主体の操作によって受け手の「受け取るもの」がより表現主体の「送ろうとしたもの」に近づけられる場合もある。

bec は表現物を通して，効果，影響が受け手に浸透する過程を表す。受け手の状態（心的状態，社会的立場・状況など）によって，目的とする効果の質や効果の程度がことなることもあるので，受け手の状態，表現物と目的は相互作用する関係であることを示している。

abc は表現主体，受け手，表現物の相互関係，相互作用を表す。3 者がコミュニケーションが成立する要素として位置づけられ，相互の関係と作用がコミュニケーションの基盤となることを示している。

2. 基本図の展開

a. 表現主体の行為としてみた表現物の形成

基本図を，辺 ab を正面になるように置いてみると adbe（adb,aeb の連続面）がみえる。この面上にある要素は，主体と表現物の相互関係を生じさせる表現過程の直接条件を表すものである。隠れた面は主体が，考慮に入れるべき事柄であるので，ここでは間接的な関与をする要素である。

表現主体が目的達成のために，表現行為を行うことは前述した。この目的は自発的な場合もあるし，他者の強

制（命令）や，業務上の必要から起こる場合もある。目的や表現の対象が強制されたものであるか，自発的なものであるかは，表現過程の各段階におこる選択という局面で，表現主体の選択の自由度に関わる。いずれにせよ，目的によって，また表す対象によって，ふさわしい表現手段（話す描くといったこと）や表現物の形式が決まる。次に頭や，心に描かれた表そうとする事柄は，体外へ表されるために，構成要素としての単位化がなされる。この単位化とは，たとえば言語表現であれば，表現対象を指示する語に置き換え，語の連続によって意味のまとまりを作ることである。この過程を伊藤[11]や武者小路[27]は「情報の圧縮化」の過程ととらえている。

さらに，この単位化された構成要素は構成（配置，順序など）によってさらに大きな単位にまとめられなければいけない。まとめるためには，どの様な構成の仕方が目的達成のためにふさわしいか，効果的か，判断し，選択されながら，また，表現物の形式のなかで，それらの構成が可能か，妥当であるのか，判断しながら表現物の作成が進められていく。この過程を今井[2]は「構想」という用語を用いて説明している。

表現物の形成は表現主体の判断，選択のくりかえしによる構成の過程とも見ることができるが，それぞれの要素が構成の決定の拠り所として，または条件としてはたらきあうきあう過程であるともいえる。ただし，この過程としては，一方向に向かう直線的なものではなく，繰り返しのループがあったり，並列的に生ずることがあるものととらえた方が，より適切であると思われる。

またこの過程を経て完成した表現物は相互作用の集約であり，帰結点とみなすことができる。表現物について内容と形式という側面からとらえることはできるが，両者を切り放した状態のまま表現物を形作ることはできない。

b. コミュニケーションの成立条件

基本図について，　辺 ac を正面にしてみえる　adce（adc, aec の連続面）はコミュニケーションの基本的な成立要素の関係を示したものである。この図はコミュニケーションが表現主体と受け手の相互関係で成り立ち，文脈，目的がこの関係を成立させる条件として存在することを表している。

この面を裏にして，点 b が中心となる cdae の面を見ると，表現物のコミュニケーションでの位置づけが現れてくる。コミュニケーションと関連づけて表現過程をとらえようとするとき，中心となる点 b で示される表現物は，表現主体のあらわしたものと，受け手の受け取ったものが同一であることを示している。ただし，あらわされたものに対して，表現主体の「込めたこと」とそれについての理解，解釈，予測した効果と，受け手の理解，解釈，影響が完全一致するとは限らない。

コミュニケーションは「表現主体と受け手のそれぞれの文脈と目的の不一致な部分があるからこそ行われる」という考え方がある。そもそもコミュニケーションとは，語源をたどるとラテン語の communis（共通な）communicatus（他人と交換しあう）に由来する[28]。つまり人と人とが相互作用しあって，ある事柄に対して共通になることがコミュニケーションであるという考え方である[23][28]。このことを裏を返してみると，共通ならざる事柄の存在が，「他人と交換しあう」ことの必要性を生じさせる。また，Burke[19][21][22] は他人が疎隔の状態になければレトリックを駆使した（つまり積極的な）同一化をはかる必要はないと考えている。

しかしながら，表現主体と受け手の文脈や目的がまったく異なるのであれば，表現主体と受け手がコミュニケーションの場において同座しないことを意味する。表現主体と受け手の間に何らかの接点がなければ，両者の関係はお互いに独立した点のままである。つまり，お互いに共通する，あるいは共有する文脈を互いの接近の手がかりにしなければならない。

また，たとえ文脈の共通点があったとしても，表現主体にとっては目的がなければ表現物の形成は行われないし，また伝えるべき受け手も存在しないことになる。また受け手も同様に，コミュニケーションに積極的に参与するのは，動機として作用する目的があるからである。コミュニケーションにおいて求めるものが，表現主体の目的の対象と一致する部分があってはじめて受け手にとっての表現主体との関係が生じるのである。したがって文脈と目的のこのような条件としての位置づけは欠くことができない。

さて，adce の図はあくまで成立条件と要素の相互関係を表しているにすぎない。この図ではコミュニケーションの過程を述べるには，不十分である。コミュニケーション過程全体を述べるために，基本図を転じ，adce を真裏から見た面 cdae を正面に据えてみる。すると図の中央に表現物を表す点 b が位置する。これによって実際に表現主体と受け手がコミュニケーションを行うのは表現物を通してであることを示すことができる。

V. 結　　論

本研究では，情報メディアの形成過程に関して，表現過程（表現物を生み出す行為）に関する研究領域の成果を取り入れてとらえる見方を追求した。

まずレトリック研究および日本の表現学の考え方を参照しながら，表現の概念を探求した。とくにBurkeの強調する動機の概念に注目し，これを鍵概念として表現過程を考えるための枠組みを検討した。

このような観点からまず，表現過程において表現物および人間（認知過程）にかかわる諸要素を特定した。ただしそれら要素は表現物の側と人間の側とに分けずに並べ，それら要素間の相互関係を示す図式（表現行為に関する基本図）を提示した。さらに様々な表現行為を分析する作業において，どのような要素や関係に目を配るべきか検討し，基本図の使用方法の一例を提示した。

基本図は，あくまで過程や状況における要素関係を表しているにすぎない。しかし，情報生産（情報メディアの形成）を表現行為としてみる観点から論じようとするとき，この図を参照することができる。基本図において，立体を転がすようにして，立体の各面へ目を配ることにより，要素や関係，そこで起こると考えられる相互作用を記述していくことに役立つ。

基本図において，検討の対象となることに該当する面や辺においては，そこに現れたすべての要素や要素の間の関係が，検討しようとする問題に関わる基本的な要素であることを示している。しかし，このことは，その見えている要素だけに言及すればよい，ということを意味しているのではない。あくまで全体的な相互関係であり，その見えている側面は全体を構成する一部である。そしてつねにこのことを念頭におくことが必要である。

基本図はつねに表現過程における基本要素と要素の間の関係を意識させる構造を持っている。各要素に変数として具体的な条件を代入することによって，いろいろなケースを設定することができる。そのことにより，要素および要素関係を，多面的な観点でとらえられるので，表現物の形成と，伝達も含めた過程を動的に描くための枠組みとして用いることができるであろう。また，この基本図はつねに人の行為を考える時の準拠枠として用いることも可能であろう。

今後の課題としては，具体的なケースの設定と実際の問題の分析・検討に用いて，情報学での有意義な成果を出すことである。

まずはじめの段階として以下のような試みを検討している。津田と村主の研究[29]で，レビューにおける引用されている文献の選択が必ずしも客観的に行われているのではないことが明らかにされている。この研究では，異なる著者による同じような主題で，出版年にもあまり差異がない複数のレビューについて，引用される文献にばらつきがみられた。このことに関しての要因を検討する際に，1つの方法として本稿で提示した「表現行為」と捉える枠組みを用いることができるのではないか。なぜ，あるレビューで，ある文献は何度も言及し，一方で他のレビューでは評価しているものを，あるレビューでは引用しないか，といったことなどについて，レビューに明示されている著者の観点や目的だけで説明することは難しい。説明しきれない「なぜか」といった問題点があるならば，表現過程に目を向けることによって，そのレビューに記述されていることだけでなく，「なぜ，そのように記述されたのか」という観点からも分析が可能となる。

具体的には，たとえば著者を中心にしてみると，学位論文として書いているのか，ある程度著名な研究者が依頼原稿として書いているかといった目的の違いや，想定される読者層も大きく異なると考えられる。また文献の入手の難易度があるとすれば，著者の居る地方や所属などの環境に左右されるだろう。あるいは，何に発表することを目的としているか，掲載される場が雑誌論文としてなのか，レビュー誌なのかといった点も影響してくると考えられる。同じようにして，他の点（第6図の基本図に代入できる要素）についても，検討を加えることによって，表現過程としてのレビュー執筆過程が説明される。

上記はレビュー文献についての試論であるが，他の情報メディアについても同様に取り組むことは可能であると考える。このようなアプローチはある情報メディアの「なぜ，そのように形成されたのか」という問題についての，一端を明らかにし，情報生成に関しての有意義な試みとなるであろう。

最後に，本論文執筆に際して研究の趣旨をご理解下さり，始終あたたかくご指導いただいた愛知淑徳大学文学部の津田良成教授に深く感謝の意を表する。またレトリック研究についてご示唆いただいた愛知淑徳大学文学部の五島幸一教授に厚く御礼申しあげる。

引用文献

1) 今井文男. 文章表現法大要. 東京, 笠間書院, 1975, 113p.
2) 今井文男編. 表現学の理論と展開. 東京, 冬至書房, 1986, 195p.
3) 村石利夫. 日本形容詞句辞典. 東京, 日本文芸社, 1981, 510p.
4) 栗原 裕. 表現学を考える. 表現研究. No. 48, p. 10-16(1988)
5) 板倉篤義. 文章と表現. 東京, 角川書店, 1975. 218p.
6) 赤祖父哲二編. 英語イメージ辞典. 東京, 三省堂, 1986. 400p.
7) Foskett, D. J. Theory and oractice in presentaion of information. International Forum Information Documentation. Vol. 1, No. 1, p. 5-9 (1975)
8) Ennis, M. The design and presentaion of informational material: a review of UK research trends. Journal of research communication studies. Vol. 2, p. 67-81(1979/1980)
9) Orna, E.; Stevens, G. Information design and information science: New alliance. Journal of Information Science. Vol. 17, No. 3, p. 197-208 (1991)
10) McArthur, T. "The representing knowledge for human communication". Informatics. No. 9. Jones, K. P, ed. London, Aslib, 1987. p. 9-19.
11) 伊藤祐三. Documantation への試み. 図書館短期大学紀要. No. 13, p. 77-93 (1977)
12) 武者小路澄子. 原著論文と抄録の関係における質的分析: 情報の圧縮化へのアプローチ. Library and Information Science. No. 26, p. 1-28 (1988)
13) 武者小路澄子. 学術情報の流れの中でのレビューの形成:「ミトコンドリア」に関するレビューの質的分析. 医学図書館. Vol. 37, No. 4, p. 227-243 (1990)
14) 永野 賢. "文章表現の過程". 表現学論考. 今井文男還暦記念論集刊行委員会編. 愛知, 今井文男還暦記念論集刊行委員会, 1976, p. 165-169
15) 林 巨樹. "2 着想と展開". 表現学の理論と展開. 今井文男編. 東京, 冬至書房, 1986, p. 31-41
16) 東 節夫. "1 言語と表現". 今井文男編. 東京, 冬至書房, 1986, p. 25-30
17) 鶴見俊輔, 粉川哲夫. コミュニケーション辞典. 東京, 平凡社, 1988, 630p.
18) 佐藤信夫. レトリック感覚. 東京, 講談社, 1992, 332p.
19) 川島彪秀, 岡部朗一. スピーチクリティシズムの研究. 東京, 青学出版, 1978, 181p.
20) 佐々木健一. 言語の造形と空間: 修辞学と美学. 思想. No. 682, p. 26-48 (1981)
21) 森常 治. ケネス・バークのロゴロジー. 東京, 剄草書房, 東京, 1984, 234p.
22) Burke, Kenneth. A Grammar of Motives. Berkeley, University of California press, 1945, 530p. (動機の文法. 森常治訳. 東京, 晶文社, 1982, 483p.)
23) 森岡健二. "表現と効果". 表現の方法. 森岡健二ほか編. 東京, 明治書院. 1964, 352p.
24) 篠原 実. "表現過程の再構成としての解釈", 表現学論考. 今井文男教授還暦記念論集刊行委員会編. 愛知, 今井文男教授還暦記念論集刊行委員会, 1976, p. 255-259
25) 西尾光雄. 表現学への提言. 表現研究. No. 40, p. 20-26 (1980)
26) Dubois, P. et al., ed. ラルース言語学用語辞典. 東京, 大修館書店, 1980, 588p.
27) 武者小路澄子. 情報の圧縮化: 言語学分野におけるメディアの性質を例として. Linrary and Information Science. No. 22, p. 99-118 (1984)
28) 川勝 久. 知的表現の方法. 東京, 産業能率短期大学出版部. 1978, 175p.
29) 津田良成, 村主千賀. レヴュー文献における収録文献の選択: 臨床医の情報ニーズ・情報探索行動に関する3つのレヴュー論文の比較. Library and Information Science. No. 32 p. 1～16 (1994)

付録 1　II 章での辞書記述の検討例【抜粋】

例: *expression* の場合（O は OED, W は Webster の略）

(1) *the action of* pressiong out　(O)

squeezing

act　of pressiong out　(W)

product of

(2)　手段: act or process of ～ - *in words*　(O)

(or) *symbols*　(O)

action　of ～ - *by langage* (W)

in words　(W)

some other medium　(W)

(sometime) *in action*

(3)　対象　expressing　of　*a meaning*　(O)

thought　(O)

state of things　(O)

manifests　*thought*　(W)

character　(W)

quarity　(O) (W)

feeling　(O) (W)

(4)　形式、様式など

manner, diction　|

means, phraseology | of representation in langage

wording　|　(O)

form, pose　|whichi|　manifests

phrase, token　|　|　symbolizes　(W)